

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制

教育部会

(責任者名) 富田 寿人

(役職名) 部会長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点		自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点		
プログラムの履修・修得状況		<p>本教育プログラムの科目「データサイエンス概論」は2022年度前期に初開講され、2025年度の履修状況・修得状況は以下のとおり。</p> <p>理工学部・・・履修者数252名、修了者数205名 情報学部・・・履修者数154名、修了者数137名</p>
学修成果		<p>教育部会において、科目ごとの成績評価分布状況を分析し、授業内容の学生の理解度を把握する。また、LMSその結果を情報教育研究センターと共有し、本教育プログラムの評価・改善に活用している。</p> <p>2025年度の成績評価割合 秀・・・18.7%(76名) 優・・・30.8%(125名) 良・・・23.2%(94名) 可・・・11.6%(47名) 不可・・・15.8%(64名) ※不可の割合は同一学年配当のⅡ類科目全体平均(18.5%)と比べてやや低く、理解度は一定水準に達しているといえる。</p>
学生アンケート等を通じた学生の 内容の理解度		<p>本教育プログラムの科目「データサイエンス概論」において、受講者全員に対して授業改善学生アンケートを実施して、学生の理解度を教育部会において分析している。</p> <p>2025年度授業改善学生アンケート平均点 3.97点/5.00点 (※全科目平均4.01点)</p>
学生アンケート等を通じた後輩等 他の学生への推奨度		<p>授業改善学生アンケートの自由記述欄の回答内容をピックアップし、「学生の生の声」として教育プログラムのホームページや次年度のガイダンスなどで紹介し、後輩学生や他の学生への推奨に活かす予定。</p> <p>自由記述欄の回答内容 ・他の学科の先生の講義を受けることが出来て、様々な視点からデータを学ぶことが出来て良かった。 ・広く浅くデータサイエンスについての認識を得ることが出来た。普段関係のない教授の講義を受けることが出来て、いままで触れる機会のなかった楽しみがあった。 ・色々な分野の話を聞けて良かった。</p>
全学的な履修者数、履修率向上 に向けた計画の達成・進捗状況		<p>目標を達成するために、前期履修ガイダンスでの周知に加え、学生ポータルサイト等の機会を利用してすべての学生に対して周知し、本学Webサイトに本プログラムのページを設置して関連情報を掲載し在学生在が情報を得やすい環境の整備に取り組んでいる。また、教務委員会や教授会において、本学における当プログラムの重要性を説明し、教職員の意識付けを行うことで前述の周知取組みを全学体制で行っている。また、本プログラム修了者に修了証を授与するなど多くの学生に周知を行い、引き続き履修者数、履修率向上に向けた取り組みを行っていく。</p>

自己点検・評価の視点		自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点		
	教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	修了者の中には、情報関連分野の企業への就職を志望する学生も出てきている。情報関連分野以外の民間企業や公務員志望の学生においても本教育プログラムで学んだ知識を活かせると考えているようである。
	産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	<p>静岡県のVIRTUAL SHIZUOKAの担当者を特別講師として招聘し、企業や行政におけるデータサイエンスの利活用について実際のケースを交えて講義を実施している。講師打ち合わせの際、当該教育プログラムの内容や実施方法について意見交換を行っており、収集した意見を情報教育研究センターへ提供し、プログラムの改善に活用していく予定。</p> <p>2023年度より数理・データサイエンス・AI教育強化拠点・東海ブロック会議(名古屋大学・主催)に参加しており、2024年度は「データサイエンス概論」における上述のような各担当者の創意工夫の詳細と、3年間実施した結果、履修者が着実に増えているという成果を紹介するポスターを作成し、他の認定校から来た参加者と議論を行った。</p>
	数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	第1回目の授業時に「データの利活用を中心としたデータサイエンスを学ぶ意義」について説明している。また、第5～14回にかけて各学科の専門性に沿った事例紹介を行うことで学生の興味関心を喚起している。
	<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p> <p>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p>	<p>モデルカリキュラムとの照合、学生アンケート、産業界からの意見、プログラム担当教員間の意見交換などから、内容・水準を維持・向上させるとともに、学生の「分かりやすさ」の観点を重要視し、授業内容・実施方法等の見直しを検討している。</p>